



Title	日英語名詞表現の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2016, 56, p. 21-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56929
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日英語名詞表現の語彙概念拡張と 項・付加詞の非対称性

岡田 禎之

1. はじめに

ある語が、本来の字義通りの解釈の範囲を超えて、これと関連する別の指示対象を指す場合、その語彙の意味拡張が生じると考えると、このような意味拡張は言語の至る所に観察できるであろうことは想像に難くない。本稿では特に名詞の概念拡張について取り上げて考察していく。名詞の語彙概念拡張のあり方が、当該名詞が項位置に用いられる場合と付加詞位置に用いられる場合とでは、体系的な振る舞いの違いが認められることを観察していきながら、どのような条件の下で概念拡張が認められていくのかを考えていく。その際、英語および日本語のコーパスデータを利用して名詞の概念拡張分布の実態を調査しながら、それぞれの概念拡張解釈を、その名詞表現の意味解釈の全体像の中でどのように位置づけるべきなのかを考えることで、概念拡張の生産的なメカニズムを示唆していきたい。本稿に先立って、拙論(2013)でも英語の名詞表現に関して同様の主張を行い、データの提示を行ったが、その後いくつか議論内容を変更する必要性が生じたことや、データ自体の取り直しを行うべきと判断したことから、改めて議論を提示しなおしたいと考える。

ここでは概念拡張を Hilpert のメトニミーの考え方を少し修正して、最後に *beyond the range of Ri* と書き加えて以下のように捉えておきたい。また、*nominal category* に話を限定しているので、これに合わせた修正も加えておく。

Conceptual expansion of a nominal--an indirect reference in which a nominal refers not to its default referent Ri, but to another referent Rj beyond the range of Ri.

(cf. Hilpert 2006: 126)

この定義で明らかなように、いわゆる *active zone-profile discrepancy* の例は、概念拡張とは考えない。John filled up the car (gas tank of the car) も John washed the car (exterior of the car) も John vacuum-cleaned the car (interior of the car) も、car によって指し示

される物理的事物に対する働きかけである点に変わりはないので、car という表現が指し示す事物の範囲を超えた事象を指し示しているとは考えないこととする。あくまでも、literal な解釈が指し示す事物の範囲を超えた、その表現が指し示す事物とは異なる事物を指し示していると考えられる場合だけを、概念拡張の事例と見なす。¹⁾ またこの考え方に従って、メトニミーに話を限定せず、メタファー事例も考察対象とする。例えば、at the mouth of the river のような表現に登場する mouth は、生物の「口」を表しているわけではなく、類似に基づいて「川が海に注ぐ地域」を指しているし、Juliette is the sun. の the sun は字句通りの「太陽」ではなく、「喜び、生命の源としての存在」を表すものと考えられるが、これらも名詞表現が、字句通りの範囲を超えて指示内容を拡張させていると捉えれば、概念拡張の事例であると考えることができる。もう一つの注釈として、上記の定義から本稿では語の意味解釈の中でも、指示的な意味に話を限定し、機能的な意味（例えば接辞化したものなど）への拡張については考えないこととする。

この概念拡張という話題は、主にメトニミーとの関連で語られてきていると思われるが、どのようなパターンが生産的であるか、（例えば human for non-human, controller for controlled などが逆のパターンより生産的であるとか（Radden & Kövecses (1999), Handl (2011) など）、どのような理解の仕組みによって成立していると考えられるか（例えば domain highlighting (Croft 1993), facetization (Paradis 2011) など）、どのようにカテゴリー分類されるべきか（conventional vs. non-conventional (Nunberg (1979), Deignan (2005)), metonymicity (Barcelona 2003), metaphonymy (Goossens 1990) など）といった問題は良く取り上げられてきていると思われる。しかし、どのような構造条件においてこれが生産的に認可されるのか、どのような分布特性が認められるのかといった視点からの研究は筆者が知る限りにおいて、それほど大きく取り上げられてきてはいないと考えられる。

本稿では、この分布特性を決定する条件として、項・付加詞の非対称性の問題を取り上げ、これと概念拡張解釈の可能性には強い相関関係がある、ということを検証していきたい。以下2節では、まず概念拡張と、項・付加詞位置との関係について基本的な考察を行い、本稿で行う調査の内容について確認する。3節では、英語、4節では日本語に関するコーパス調査の結果と代表的なデータの検証を行う。5節は調査内容のまとめ、およびこれまでの考察内容から導き出すことが可能ないくつかの仮説を取り上げてその妥当性を検討し、今後の調査の方向性を考えていく。

2. 項・付加詞と語彙概念拡張の分布

先述の通り、どのような構造条件の下において生産的に概念拡張が生じるのか、といった問題はこれまであまり扱われてこなかったものであり、Waltereit (1999) や Sweep (2009)

が例外的な研究であると考えられる。彼らは動詞の目的語位置において最も生産的にメトニミー解釈(概念拡張解釈)が生じる、という考え方で一致しているが、Waltereit はさらに階層を提案しており、他動詞文で目的語位置がある場合にはこの位置で優先的にメトニミーが生じ(1)、これがない場合に主語位置(つまり自動詞の場合に主語位置)でメトニミー解釈が生じ(2)、これ以外の位置ではメトニミー解釈は生じにくいとする優先順位をつけている(Direct Object > Subject > Others)。しかし、このような階層性に関しては反例が多く存在することが認められ、Waltereit 自身もそのことを認めている。他動詞の場合、つまり目的語位置が存在する場合にでも、主語のメトニミー拡張は認められるし(3a~d)、斜格要素であっても、場合によっては拡張が認められるのである(3 cf.)。

- (1) a. John erased **the blackboard**. (=writings on the blackboard)
 b. Turn off **the soup**. (=the fire heating the soup) (瀬戸 2005: 125)
 c. John answered **the phone**. (=the person on the other side of the phone line)
 (Radden & Kövecses 1999: 47)
- (2) **The kettle** is boiling. (=water in the kettle)
- (3) a. **The flute** has a cold today. (=player of the flute)
 b. **The White House** isn't saying anything. (=officials in the U.S. government)
 (Lakoff and Johnson 1980: 38)
 c. **Some new blood** may change the whole situation. (=some new people)
 d. **The Times** didn't ask any question at the press conference.
 (=reporter from The Times)
- cf. Our table looks like a **commercial for the Michelin Guide**.
 (=a table featured in a commercial)

ところで、(3a-d) に挙げたような事例は、(4) にあるように、主語、目的語などではなく、ただの付加詞要素であると考えられる場合にも、同じような拡張解釈を得ることが可能である。

- (4) a. The conductor got off the stage with **the flute and the trumpet**.
 b. We haven't got any positive reactions other than the one from **the White House**.
 c. With **some new blood** in the team, we may be able to win the championship.
 d. At the press conference the president lost his temper because of the comment of **The Times**.

拙論 (2013) では、このように項位置、付加詞位置という位置の違いに関係なく得ることができる概念拡張がある一方で、項位置において認めやすく、付加詞位置では認め難いタイプの概念拡張も存在しているのではないかと考えていた。しかし、その後の考察で、必ずしも項位置において認められても、付加詞位置では「認められない」と主張するのは妥当ではない、と考えるに至った。

まず (5) ~ (8) の例を考えてみたい。「ヤカンが沸いている」という場合は「ヤカン」で「ヤカンの中の水」を指すことができる (5a) が、「ヤカンで火を消した」という場合は、「ヤカン」そのものをたたきつけて火を消しているという解釈が優勢であり、「ヤカンの中の水」で火を消したという解釈は取りにくくなると思われる。日本語でも英語でも同じことが言えるようである (5b)。このような場合は「ヤカンの水で」と字句通りの解釈をとれるように明示する (5c) ことが望ましい。次に (6a) 「スープを止めて」、というのは「スープを温めている火」を消してくれということであるが、(6b) のように付加詞位置に soup という名詞を置いてやると、たとえスープが火にかけられているということが分かっている場面であっても、soup で「火」を指し示すということは難しく、字句通りに「スープを温めている火」と表現しなければならなくなる。(7a) では、「黒板」によって指し示されているのは、「黒板に書かれた文字や記号」であるが、(7b) ではこのような解釈は取られず、「黒板」という物理的事物そのものを指している。もし、(7b) で blackboard が「黒板に書かれた文字や記号」を指しているのであれば、黒板には signature 以外にも様々な文字や記号が書かれていなければならないはずであるが、実際にはそのような場面を指しているとは限らず、黒板に唯一書かれているのがその signature であっても良いのである。

- (5) a. **The kettle is boiling.** (=water in the kettle)
 b. ??I put out the fire with **the kettle**.
 c. I put out the fire with **the water in the kettle**.
- (6) a. Turn off **the soup**. (=the fire heating the soup)
 b. ??Don't leave flammables around **the soup**.
 c. Don't leave flammables around **the fire heating the soup**.
- (7) a. John erased **the blackboard**. (=writings on the blackboard)
 b. John erased the signature off **the blackboard**.

このようなデータを見ると、項位置では「可能」でも、付加詞位置では「不可能」なタイプの概念拡張が存在する、と思えるかもしれない。

しかしながら、このような事例の場合であっても、並行的な結束関係にあると見なされる

付加詞位置においては、同じような概念拡張が可能なのである。

- (8) a. All the kettles are boiling at the moment, except kettle number 4.
 b. In addition to this blackboard, he also erased the blackboard in the adjacent room.
 c. Lunch is almost ready. Please turn off everything now except the tomato soup.

つまり生起環境を整えてやることによって、概念拡張解釈はかなり自由に行えることが判明したのである。このように見てくると、「付加詞位置だから不可能」という概念拡張はないように思われ、分布特性を議論することは無駄な作業であるようにも見え、また Waltereit の階層性も全く信憑性がないもののように思えてくる。

しかしその一方で、(8) のような事例は、項位置にある要素の拡張解釈が、付加詞位置の要素にも並行的に認められているというものであって、あくまでも項位置での概念拡張がベースにあってこそ認可されているものであることも明らかである。実際、(8b) のように付加詞要素を前置して、その部分だけで拡張解釈を適切に割り出すことはできない。後続する主節の内容が判明した時点で、初めて適切な拡張解釈を与えることが可能になるのである。

つまり(8)のように、項位置の拡張解釈が引き金となって付加詞位置の拡張解釈が得られることもあれば、充分な文脈が整わずに付加詞位置での拡張が難しい事例も存在するようである((5)～(7))。項位置での拡張がたやすく、付加詞位置で独自の innovative な拡張解釈が生じにくいということになるのであれば、そこから一つの仮説として、以下のように考えることができるのではないだろうか。

仮説：argument 位置において可能な拡張解釈は必ずしも adjunct 位置において成立することはないが、adjunct 位置において成立する拡張解釈は、基本的に argument 位置においても認められる。(adjunct 位置においてのみ認可される概念拡張は見出しにくい。)

以下、この分布特性に関する予測が妥当なものであるかどうかを、現実の名詞表現の使用状況に即して検証していきたいと考える。

筆者が何故コーパスデータによる検証が必要と考えたかについて述べておくと、初期調査の結果として、現実にある場面で概念拡張解釈を認めるかどうかは、人により、文脈によりかなり左右されるところがあったからである。例えば、(5b) の「ヤカンの水で火を消す」という事例については、native speaker の間で結構判断が分かれている。(5b) は何の問題もないのだ、という判断を下す話者も存在しているのである。「ヤカン」と中身の「水」はかなり近い関係にあり (Handle 2011: 191)、前者で後者を指すという解釈は、それほど難しいものではないと考えられる。人によっては、この事例は、むしろ (3) (4) のグループに属するものだとも考えられるようである。また、ある native speaker に言わせると、(1)

や(2)などは idiom であり、特別な解釈を例外的に与えられるものだという意見もあった。しかし何を idiom と認めるのかは、程度の問題であり、後付けに過ぎないと考えられる。ある拡張解釈を idiom であると線引きすることも困難であれば、ある拡張解釈が認められるか認められないか、という線引きを行うことも、微妙な事例になってくると、とても難しいことになるのは想像に難くない。

このように判断が揺れるところがあり、かつ広範囲にわたる現象に関して、少ない用例データを用いて、個人の内省直観判断だけで議論を構築するには限界があると思われたことから、筆者はコーパスのデータを量的に検討することで、このような概念拡張の方向性を証拠立てることは出来ないか、と考えた。より広いコンテキストの中で、これらの様々な名詞表現に与えられている解釈がどのような特徴を持っているのか、を調査してみるべきではないかと考えたのである。

また、語彙意味変化のあり方は特定の言語に特有なものであるとは考えにくく、同じ原理が他の言語においても認められて不思議はないと思われる。ここでは英語と日本語に関して同様の調査を行い、並行的な観察が認められるかどうかを検証してみたい。

本節の最後に、何故項位置と付加詞位置で仮説にあるような違いが生じるのかについて、筆者の考えを少し述べておきたい。文の中心的な参与者と周辺の参与者がある場合、どちらが文脈に適した解釈を与えるための処理労力を掛けるに値する参与者であるのか、という観点から考えることが出来るのではないと思われる。「ヤカン」で「ヤカンの中の水」を表したいと思っても、項位置においては可能なのに、付加詞位置では相対的に難しくなるのは、前者が文脈に沿って適切な解釈を与えるために解析コストをかけるに十分な、文内参与者として主要な対象であるのに対して、後者はそのような解析コストをかけるのが不釣り合いな周辺の要素として文に導入されている、ということが関係しているとは考えられないであろうか。「ヤカンの水で火を消した」という状況を伝えたくても、別の状況においては「ヤカン」で「ヤカンの水」を指すことができる場合が確実に存在している(5a)としても、その方略をそのままこの文脈に持ち込むことはやりにくいようである。²⁾

このような事例がある一方で、項性とは全く関係なく、どのような生起環境においても比較的認められやすい概念拡張の事例というものも存在している(3)(4)。これは、かなり当該解釈の慣習化が進み、その解釈を得ることが容易になっている場合であると考えられる。

つまりその特定の拡張解釈がどの程度慣習化してきているのかによって、その解釈へのアクセスのし易さは異なるところがあり、それは人により、また状況により揺れる部分も多いのである。そうであるならば、なおさら、内省によらず現実の使用分布を調査することにも意味はあるといえるのではないだろうか。

3. 英語に関する調査

3.1 調査方法と留意点について

筆者はこれまでの調査の中で(まだ調査途上ではあるが)英語に関して30個の名詞表現をピックアップし、それぞれBNC(British National Corpus)から250の項位置での使用例と、同じく250の付加詞位置での使用例の、合計500事例をランダムに選択し(500に満たないものはその実数に合わせている)、それがliteralな解釈を与えられているのか、拡張解釈を与えられているのかを、項性との関係において分類してみた。ちなみに拙論(2013)では、単にランダムに500事例を取り上げて分類していたが、項位置の用例、付加詞位置の用例の件数を等しく取り上げ、分布を調査すべきであると考え、データを取り直して修正している。この再調査に基づいて、ここでは前節での予測を検証していきたいと考える。

概念拡張の分布状況が、項・付加詞という意味的・統語的配列関係上の特性と関連づけられてコーパス調査が行われたことは、筆者が知る限りにおいて、過去に例がないものである。もしこの予測がサポートされる結果になるのであれば、概念拡張の生産的体系の一つを特定することができるのではないかと考えられる。以下では実際の解釈の分布のあり方がどのようなになっているのかを見ていくこととするが、その前に分類上のいくつかの注釈を列挙しておきたい。

(i) 項であるか付加詞であるかの判断について。主語、目的語その他の義務的要素は項と考えたいと思うが、斜格表現に関して判断に迷うものについては『研究社新英和大辞典第6版』で当該の述語の意味を確認して、特定の前置詞を指定記述してある場合は、これを述語の項要素であるとカウントすることにしておく。選択される前置詞表現が特定化されるほど、項的な要素であると考えやすくなると思われるためである(Reinhart & Reuland 1993: 664)。また動詞だけではなく、動詞が名詞化したものも predicate と考えて、この名詞文において必要とされる要素も項と考えておく。

(ii) 分類カテゴリーは4つとした。それは① argument 位置にあり、字句通りの意味を持つもの (Argument Literal (AL))、② adjunct 位置にあり、字句通りの意味を持つもの (Adjunct Literal (JL))、③ argument 位置にあり、拡張解釈を持つもの (Argument Expanded (AE))、④ adjunct 位置にあり、拡張解釈を持つもの (Adjunct Expanded (JE)) である。

(iii) 固有名詞(e.g., Martin Kettle, Talking Heads, etc.)や論文、記事のセクションタイトルなどは、基本的に除外する。また詩の表現など、解釈を定めるのが難しいと思われる用例は500事例から省いて、他の用例を加えて分類している。

(iv) 関係節などを利用することで、ある名詞表現が一方の節では argument、他方の節では adjunct になっている場合などは、主節要素としての status で基本的に分類する。ただ

し、主節・従属節で argument/adjunct の status によって解釈が異なる場合には、それぞれ argument/adjunct の事例としてカウントする。

e.g., Or in 1982 the Navy would fight the Falklands, the very spot where in 1914 it won a spectacular victory...

ここで主節側の Falklands は argument であり、場所ではなく Falklands war という event を表す拡張事例であると考えられるが、関係節内では字句通りの場所を表す付加詞表現として機能していると思われる。このような場合は1つの事例を別個の2つの事例としてカウントする。

(v) classifier として当該の名詞が用いられている場合、adjunct と分類しておく。

e.g. (イ) He drank a bottle. (argument expanded (“bottle” refers to “wine”))

(ロ) He drank half a bottle of whisky. (a bottle of=adjunct classifier, whisky=object)

(ハ) Mama had made a big kettle of soup. (kettle=adjunct classifier)

(ニ) He brew up a kettle of some herbal concoction. (kettle=adjunct classifier)

(vi) literal にも expanded にも解釈することが可能と思われる場合、基本的に literal に分類する。

e.g. (イ) ...the Frankfurt Assembly offered the King of Prussia the imperial crown in 1849...

(ロ) Could a divorcee inherit the Crown?

(ハ) The crown will pass directly to Williams.

例えばこれらの授受関係の動詞の場合、物理的事物としての「王冠」の受け渡しとも考えられるし、「王位」の受け渡しとも考えることができるが、それぞれの文脈情報だけからこの識別を行うことは困難であるので、literal な解釈を優先して分類する。つまり、ここでは基本的に literal な解釈ではなく、拡張義であると明確に理解できるもの以外は、literal な表現と捉えることとする。

(vii) 本調査では、前述のようにメタファーとメトニミーを区別立てせずに、等しく概念拡張事例と見なすこととするが、特にメタファーに基づく概念拡張事例と考えられるものについては、便宜上、以下の表の中に [metaphor] という注記を付けておくこととする。

さて、実際の調査結果についてであるが、ここでは以下の通り4タイプに結果を分類しておく。

- ① AEの解釈幅がJEの解釈幅より広がったもの(17事例)

WHEELS, VOICE(S), STUDY(IES), FALKLANDS, BMW, KREMLIN, PAPER, VIETNAM, SCHOOL(S), CITY, DOOR, NOSE, PEN, MOUTH, PHONE, STADIUM, HEAD(S),

- ② AE,JEともに確認でき、解釈幅に変わりがなかったもの(9事例)

BRAIN(S), PIANO, WALL STREET, BOTTLE, CROWN, SHAKESPEARE, VIOLIN, HOSPITAL(S), TABLE

- ③ AEのみが存在し、JEが確認できなかったもの(2事例)

BLACKBOARD, KETTLE

- ④ JEにAEに存在しない解釈が認められたもの(2事例)

EYE(S), HAND

ここで、①から③のグループは、先述の予測に合致する解釈分布になっているが、④は予測に合致しない結果になっている。これについては具体的なデータをより細かく検証する必要があるので、3.5節で取り上げる。以下、それぞれのグループのデータを順次検討していきたいと考える。

3.2 ①グループのデータ検証

①はAEがJEの意味解釈を部分集合として含んでいるタイプである。例えばwheelsという名詞は、字句通りの意味である「車輪、わっか」だけではなく、「物事の進行や動機」を表したり、「乗り物」を表したり、タイヤなどの「きしむ音」を表したりできるが、AEではこの3つの解釈が認められ、JEでは前者の2つの解釈のみが認められた。例文は表の下(9)と(10)に挙げておく。なお、この「物事の進行や動機」という意味解釈は瀬戸(2007)では、機能類似に基づくメタファー(「活動などを押し進める車輪、時間・歴史・運命などの輪」として記載)であると分類されているので、[metaphor]という表記を付け加えている。この表から、wheelsの場合、ALが224例、JLは216例、AEは26例、JEは34例存在した、ということになる。このうちで、AEとJEが問題になる部分であるため、それぞれ内訳を示しておく。前者は、「物事の進行や動機」の用例が15例、「乗り物」の用例が9例、「タイヤのきしむ音」が2例であり、後者は「乗り物」が30例、「物事の進行や動機」が4例発見できた、ということである。(また、これ以降それぞれの例文の最後にあるタグは、BNC内のファイル番号を示している。)

① WHEELS (AL: 224 (44.8%), JL: 216 (43.2%))

AE	26 (Procedure/motive [metaphor]: 15, Vehicle: 9, Sound: 2)	5.2%
JE	34 (Vehicle: 30, Procedure/motive [metaphor]: 4)	6.8%

WHEELS (AE)

- (9) a. But the *wheels* of bureaucracy take time to run... (procedure/motive) (BNV)
 b. Credit was the solvent that oiled the *wheels* of many other retailers' businesses.
 (procedure/motive) (BPH)
 c. ..when it comes to his own set of *wheels*, he admits he's never had much luck.
 (vehicle) (C8B)
 d. Isobel had heard the *wheels* of his car on the gravel. (sound) (C8S)

WHEELS (JE)

- (10) a. The project is aimed at younger drivers who want totally open motoring but don't feel safe on two *wheels*. (vehicle) (A6X)
 b. ...the C.O. of the regiment chose me by interview and I had to go, being only a very small cog in the *wheels* of war. (procedure/motive) (AMC)

この①グループで最も解釈のバリエーションが多かったのは、voice(s)である。ここでも「声」で、その声を発する「人間そのもの」を指したり、声を発する人の「考え方や意見」を指したり、「方言、なまり」を指したり「意見表明者、代表」を表したり、「歌手」を指したりする用例が見つかっている。これらは項位置に置いて見つけられた用例であるが、このうち付加詞位置では「人間」「考え方や意見」「歌手」の用例が特定できている。

① VOICE(S) (AL: 193 (38.6%), JL: 234 (46.8%))

AE	57 (Person/People: 29, View/Opinion: 23, Representative: 2, Accent: 2, Singers: 1)	11.4%
JE	16 (View/Opinion: 10, Person/People: 5, Singer: 1)	3.2%

VOICE(S) (AE)

- (11) a. "I will do it," said the *voice*. (person) (CFJ)
 b. ...and many *voices* were raised in dissent. (opinion) (CCD)
 c. His quaint commentaries made him the *voice* of the modern game, providing stark contrast to the loud-mouthed antics of some superbrat players.
 (representative) (CBF)

- d. All Mr Ross could remember of the burglars was that they both had Glasgow *voices*... (accent) (CDS)
- e. ...there was a shortage of good young basses and baritones but there were many fresh, unspoiled soprano *voices*. (singers) (ADP)

VOICE(S) (JE)

- (12) a. ...the Nigerian government would speak with one *voice* to its people and to the outside world. (view/opinion) (CDU)
- b. I have in mind the boorishness of the odd *voice* which told Viv Richards just how black he was. (person) (AKV)
- c. This month's annual Maria Callas international competition for new *voices* awarded first prizes to a Japanese soprano.. (singers) (ABF)

もう一例見ておくと study (ies) であるが、「勉強、研究」ではなく、それを行う場所としての「書斎や研究室」という意味もあるし、「研究をする人」を指している場合もあると考えられる。例は (13a,b,c) に挙げておくが、argument 位置においては、このタイプの用例は 36 あり、多用されていることが分かる。³⁾

一方でこの解釈で付加詞位置にある用例はきわめて少ないが、全く存在しないわけではない。それが (14b) として挙げたものである。Waltereit の考え方では、他動詞文の主語位置において、目的語を差し置いて概念拡張が生じることは少ないはずであるが、ここでは (13) にあるように他動詞文の主語における概念拡張は生産的であり、しかもその範囲を超えて定着して、付加詞の位置においても同様の拡張が認められていると言えるのかもしれない。^{4),5)}

① STUDY (IES) (AL: 201 (40.2%), JL: 236 (47.2%))

AE	49 (Researcher(s): 36, Study room: 11, Specimen: 2)	9.8%
JE	14 (Study room: 12, Researcher(s): 2)	2.8%

STUDY (IES) (AE)

- (13) a. Research studies demonstrated ... the fact that exhaust emissions contained dangerous toxins, in particular lead. (researcher) (BN4)
- b. Future studies...will address these themes in the context of services to other client groups. (researcher) (ALN)
- c. ...studies of this kind never attempt to cross the boundary-line between behavior and inner experience... (researcher) (AMG)
- d. ...you glanced at my book by chance while cleaning his study... (room) (AE0)

e. Adam's face,..., was a study in some unpleasant emotion, not so much anxiety as exasperation. (specimen) (CDB)

STUDY (IES) (JE)

(14) a. He talked with them in his study... (room) (A68)

b. ...it was not the intention of the study to explore each activity in detail to determine where procedural or other changes were required.... (researcher) (B2M)

以下、紙面の都合上分布表のみを提示し、具体的なデータ類については割愛しておく。

① FALKLANDS (326 instances) (AL: 51 (15.6%), JL: 196 (60.1%))

AE	25 (War/Crisis: 22, Economy: 1, People: 1)	7.7%
JE	54 (War/Crisis: 53, People: 1)	16.6%

① BMW (AL: 35 (7.5%), JL: 121 (25.9%))⁶⁾

AE	183 (Car: 158, Representative/Workers: 21, Driver: 4)	39.1%
JE	129 (Car/Motorcycle: 127, Driver: 2)	27.5%

① KREMLIN (225 instances) (AL: 13 (5.4%), JL: 86 (23.8%))

AE	53 (Government 45, Spokesman/Statesman: 8)	22.1%
JE	73 (Government 73)	19.2%

① PAPER (AL: 96 (19.2%), JL: 130 (26.0%))

AE	154 (Documents/Newspaper: 149, Newspaper company: 3, News reporter: 2)	30.8%
JE	120 (Documents/Newspaper: 117, Newspaper company: 3)	24.0%

① VIETNAM (AL: 150 (30.0%), JL: 222 (44.4%))

AE	100 (Government: 64, War: 31, People: 3, Army: 2)	20.0%
JE	28 (War: 27, Army: 1)	5.6%

① SCHOOL (S) (AL: 198 (39.6%), JL: 238 (47.6%))

AE	52 (Staff: 43, Classes: 5, Sect: 2, Students: 1, School days: 1)	10.4%
JE	12 (Staff: 10, Classes: 1, School days: 1)	2.4%

① CITY (AL: 200 (40.0%), JL: 225 (45.0%))

AE	50 (Government: 25, People: 14, Financial district: 11)	10.0%
LE	25 (Financial district: 19, Government: 6)	5.0%

① DOOR (AL: 239 (47.8%), JL: 212 (42.4%))

AE	11 (Building: 5, Possibility/chance [metaphor]: 4, Ringing at the door: 2)	2.2%
JE	38 (building: 38)	7.6%

① NOSE (AL: 184 (36.8%), JL: 196 (39.2%))

AE	66 (Front end [metaphor]: 58, Instinct: 4, Smell: 3, Interest: 1)	13.2%
JE	54 (Front end [metaphor]: 52, Instinct: 1, Smell: 1)	10.8%

① PEN (AL: 229 (45.8%), JL: 221 (44.2%))

AE	21 (Writing: 20, Writer: 1)	4.2%
JE	29 (Writing: 29)	5.8%

① MOUTH (AL: 203 (40.6%), JL: 237 (47.4%),

AE	47 (Opening of things [metaphor]: 42, Words/Expressions: 4, Person: 1)	9.4%
JE	13 (Opening of things [metaphor]: 9, Words/Expressions: 4)	2.6%

① PHONE (AL: 192 (38.4%), JL: 155 (31.0%))

AE	58 (Line: 27, Person: 21, Call: 10)	11.6%
JE	95 (Line: 66, Call: 29)	19.0%

① STADIUM (AL: 240 (48.0%), JL: 247 (49.4%)),

AE	10 (People: 7, People in charge: 3)	2.0%
JE	3 (People: 3)	0.6%

① HEAD(S) (AL: 159 (31.8%), JL: 185 (37.0%),

AE	91 (Leader [metaphor]: 58, Top part [metaphor]: 29, Person: 2, Intelligence: 2)	18.2%
JE	65 (Leader [metaphor]: 34, Top part [metaphor]: 31)	13.0%

3.3 ②グループのデータ検証

次のグループは② AE と JE の解釈のバリエーションが等しかったタイプである。このタイプには9事例が属した。

この②グループで一事例だけ確認しておく。brain(s) という表現は、臓器としての「脳」以外に、脳が蓄えている「知識や知能」、脳によって顕在化する「意識、感覚」、脳に象徴される「知的な人間」などの意味を表すが、これらの意味は項・付加詞の位置関係とは関係なく、等しく認められている。

② BRAIN(S) (AL: 170 (34.0%), JL: 207 (41.4%))

AE	80 (Intellect: 43, Consciousness/sense: 30, Person(s): 7)	16.0%
JE	43 (Intellect: 18, Consciousness/sense: 15, Person(s): 10)	8.6%

BRAIN(S) (AE)

(15) a. Use your *brains*. (intellect) (ADY)

b. My *brain* is filled full of vague images... (consciousness) (APR)

c. The *brain* behind this operation had to know this. (person) (AMU)

BRAIN(S) (JE)

(16) a. I need someone with *brains* like you... (intellect) (ACB)

b. It is that representation in my *brain* that is the immediate cause of my actions.

(consciousness) (AE7)

c. ...the idea which is held in common by all *brains* that understand the theory.

(persons) (ARR)

以下の事例に関しては、①グループと同様、データをまとめた表のみを提示しておく。

② PIANO (AL: 217 (43.4%), JL: 198 (39.6%))

AE	34 (Performance: 21, Sound: 11, Lesson: 1)	6.8%
JE	52 (Performance: 50, Sound: 1, Lesson: 1)	10.4%

② WALL STREET (346 instances) (AL: 1 (0.3%), JL: 43 (12.4%))

AE	95 (Stock market: 76, People in the financial circles: 19)	27.5%
JE	207 (Stock market: 199, People in the financial circle: 8)	59.8%

② BOTTLE (AL: 237 (47.4%), JL: 244 (48.8%))

AE	13 (Content: 13)	2.6%
JE	6 (Content: 6)	1.2%

② CROWN (AL: 104 (20.8%), JL: 72 (14.4%))

AE	146 (Person (King/Queen): 115, Throne/Championship: 26, Top part [metaphor]: 3, Coin: 2)	29.2%
JE	178 (Person (King/Queen): 156, Top part [metaphor]: 14, Throne/Championship: 5, Coin: 3)	35.6%

② SHAKESPEARE (AL: 176 (35.2%), JL: 153 (30.6%)),

AE	74 (Works: 74)	14.8%
JE	97 (Works: 97)	19.4%

② VIOLIN (398 instances) (AL: 116 (29.2%), JL: 217 (54.5%))

AE	32 (Performance: 13, Player: 11, Sound: 8)	8.0%
JE	33 (Performance: 28, Player: 3, Sound: 2)	8.3%

② HOSPITAL(S) (AL: 214 (42.8%), JL: 247 (49.4%))

AE	36 (Staff: 36)	7.2%
JE	3 (Staff: 3)	0.6%

② TABLE (furniture) (AL: 247 (49.4%), JL: 245 (49.0%))

AE	3 (People at the table: 3)	0.6%
JE	5 (People at the table: 5)	1.0%

3.4 ③グループのデータ検証

3つめのグループは数が少なく2事例がこれに属した。③ AEの解釈はあってもJEの解釈が見つけられなかったタイプであるが、blackboardとkettleがこのグループに属する。erase the blackboardで、eraseする対象であるのは黒板そのものではなく「黒板に書かれた記号や文字」であったり、the kettle is boilingで沸いているのはヤカンではなく、「ヤカンの中の水」であったりするが、これらの解釈が1節で取り上げたように idiom であると考

えると、実際には (17), (18) などにあるように、study the blackboard/see (look at) the blackboard のような表現があったり、pour the kettle, the kettle spurted のような表現も存在していることから (そしてその一方で、kettle-boil というコロケーションよりは遙かに頻度が低いことから)、どこまでを idiom として認定すべきなのかは判然としなくなる。またここで考えているような、より広いコンテキストの中でこれらの解釈を見た場合、決して “The kettle is boiling./John erased the blackboard.” を特殊な事例として扱う必要はない、と考えられる。

③ BLACKBOARD (251 instances) (AL: 73 (29.1%), JL: 169 (67.3%))

AE	9 (Writings on the blackboard: 9)	3.6%
----	-----------------------------------	------

BLACKBOARD (AE)

(17) a. He studied the *blackboard*... (A7X)

b. I just couldn't see the *blackboard* because I was so short-sighted. (CH8)

c. You were looking at the *blackboard* and did not obscure your attention by scribbling down everything. (FEU)

③ KETTLE (385 instances) (AL: 199: (51.7%), JL: 135 (35.1%))

AE	51 (Content: 51)	13.2%
----	------------------	-------

KETTLE (AE)

(18) a. The *kettle* boiled. (ASE)

b. I could hardly pour the *kettle* because I was shaking. (CS4)

c. The *kettle* spurted. (G0Y)

3.5 ④グループのデータ検証

ここまでの事例はすべて、本稿の予測に合致するものであった。すなわち、付加詞位置における拡張解釈はすべて項位置において認められ、一方で項位置に認められる解釈は必ずしも付加詞位置において認定できるとは限らない、という非対称性をサポートしていた。最後に反例として残るものがあるが、それが4つめのグループであり、④JEにAEでは見つからなかった解釈が認められるもの、である。これに属する名詞はこれまでのところ2つある。その一つはeye(s)であるが、身体部位の表現はさまざまな解釈に用いられ、この名詞もセットフレーズに多用されて、様々な概念を表すように解釈が広がっている。500 事例の中から

得られた結果として、少なくとも5つのタイプの意味拡張を認定することができると考えられる。目を用いて行う「注目、着目」、目で見ることから得られる「見解、意見」、目が向けられる方向を表す「視線」、目にその機能が集約される「観察者、見張り」、目で捉える対象である「目標、目的」が、拡張解釈として確認できたが、このうち「目標・目的」を表す用例は、付加詞位置には認められても項位置には限られたデータセット内では発見できなかった。例文は(19)、(20)に挙げておく。⁷⁾

ただ、目的を表す意味では have an eye to (on) ～というセットフレーズで用いられることが、OED にも記載されており、BNC でも検索範囲を広げるとこのような用例を見つけることは可能である。(19cf.) としてコーパスからの実例を挙げておく。付加詞位置では with an eye to (on) ～というセットフレーズで、この目的の意味は良く用いられ、項位置でのセットフレーズ have an eye to (on) ～よりも高頻度で用いられているので、500 事例の中には後者の項位置における表現は認められなかったが、このような事例は少し範囲を広げることによって簡単に見つけることが可能となる。(確かにこれまでの事例についても、範囲を広げることによって、付加詞で認められなかった解釈が認められるという可能性はあるが、この意義は辞書に記載される形でその意味が認められている、ということにも意味があるのではないかと考えられる。) また、関連する OED の記載を見てみると、この意味では 14 世紀頃には既に用いられているが (21)、have an eye to にあたる表現が続き、17 世紀になってようやく副詞句表現の with an eye to が登場してきている。つまり、現在では adjunct phrase としての使用頻度の方が高く、項位置での用法は劣勢になってしまっているが、元々は項位置で多用されていた意味拡張用法であって、歴史的変化とともに使用される文脈が変化してきているのである。このような変化は他の事例にも認められうることであろうと思われる。⁸⁾

④ EYE(S) (AL: 184 (36.8%), JL: 186 (37.2%))

AE	66 (Attention: 50, Perspective/View: 7, Line of sight: 6, Observer/vigilance: 3)	13.2%
JE	64 (Perspective/View: 44, Attention: 8, <u>Aim: 5</u> , Observer/vigilance: 4, Line of sight: 3)	12.8%

EYE(S) (AE)

- (19) a. My *eyes* were immediately attracted to the table... (attention) (CDM)
 b. ...she had the artist's *eye* for subject, scene and colour. (perspective) (B11)
 c. David Weintraub, ..., dropped an *eye* towards the Secretary of State.
 (line of sight) (CAM)
 d. He never attended any public ceremonies, where the ever-vigilant *eyes* of the KGB could pick him out... (observer) (CDA)

cf. e. "I am 50 next birthday and have an eye on retiring in 10 years time," says Keith.
(aim) (CEK)

f. ...the professional must always have an eye to helping parents generalise the skills they have learned. (aim) (CGS)

EYE(S) (JE)

(20) a. ...everything he did, if not right in her *eyes*, was judged by a different standard....
(perspective) (C8T)

b. I'd like to start somewhere not too much in the public *eye*,... (attention) (C9M)

c. Sunil Gulati,..., said, "We will use this tournament with an eye to the world cup."
(aim) (CBG)

d. With their eyes on entering the 1995 World Cup qualifiers in the Asia/Pacific zone...
(aim) (CB2)

e. Hang curtains at your shed windows to hide the contents from prying *eyes*.
(observers) (CCY)

f. Having been wounded by her killing *eyes*, Strephon chooses his course.
(line of sight) (AN4)

(21) OED の eye (6b) to have an eye to ~, with an eye to ~

a. 1375 The Kyng...Till thame, and nouthir ellis-quhar had ey.
(The king to them, and not else-where had eye.)

b. 1375 I pray 3how That nane of 3ow for gredynes Haf E till tak of thair Richess.
(I pray you that none of you for greediness have eye to take off their wealth.)

c. 1526 Some feareth synne & payne bothe, hauynge an eye and respecte to bothe in maner indifferently.
(Some fear sin & pain both, having an eye and respect to both in manner indifferently)

d. 1535 They called vpon the Lorde, yt he wolde haue an eye vnto his people.
(They called upon the Lord, (so) that he would have an eye onto his people.)

e. 1593 Haue an eie to the maine-chaunce.
(Have an eye to the main chance.)

f. 1607 Men will Councell with an eye to them ~ selves. (with an eye to が初めて登場)
(Men will counsel with an eye to themselves.)

さてもう一つの例外的事例として、残っているのが hand である。hand で「支配力」を表

したり、「人間(人手)」を表したり、「手についた技術」「援助」「手書きの筆跡」を表したりするという事例が項位置で認められるが、付加詞位置に非常に生産的に認められる用法として、「一方の側(side)」を表す用例が多用されている。これは on the one hand, on the other hand というセットフレーズで登場してくるものであるが、この side の意味で用いられる hand は現在ではこのセットフレーズに集中的に認められるようである。コーパスからの用例は(22)(23)に挙げておく。この反例に関して述べておきたいことは、この hand という名詞の解釈のあり方を見ても、ヴァリエーションという点で考えれば、依然としてここでも項位置における解釈幅の方が広く豊かである、という点においては他の事例と変わりはないと思われることと、OEDの記述を見ると、過去には項位置における hand に side の意味が認められたということ(OEDの初出事例(24a)など)、on the one hand, on the other hand というセットフレーズは17世紀に登場する後発表現であること(25)、更に現在でも right hand side/left hand side という表現は項、付加詞という位置の区別と関係なく多用されており(BNC全体で300事例ほど存在)、hand と side の意味解釈が親和性の強いものであると認められること(26)、である。現在では、on the one hand/on the other hand というセットフレーズに特化した用法になってしまっているものの、本来的には hand で side の意味を示すということは可能なものであると考えることもできるのではないだろうか。⁹⁾

④ HAND (AL: 206 (41.2%), JL: 130 (26.0%))

AE	44 (Control/Possession: 34, Person: 6, Help: 2, Skill: 1, Handwriting: 1)	8.8%
JE	120 (<u>Side: 114</u> , Person: 3, Handwriting: 3)	24.0%

HAND (AE)

- (22) a. He was completely in the *hands* of the king... (control) (CFF)
 b. ...although they want to be stroked and petted like any other domestic cat, they are deeply suspicious of the *hand* that does the petting... (person) (BMG)
 c. ...Kitty mustn't ever know that I'd had a *hand* in it. (skill) (CEH)
 d. ...when she can come and give me a *hand*... (help) (A0F)
 e. ...the main text is in another *hand*. (handwriting) (CCB)

HAND (JE)

- (23) a. on the one *hand*,on the other *hand*.... (side)
 b. ...400 pounds, a sum which will be put to good use..., together with confidential counseling for those with problem pregnancies and a helping *hand* for those experiencing difficulties following an abortion. (person) (C8J)
 c. Later, he sent us a postcard...penned in his schoolboy *hand*... (handwriting) (B3F)

(24) OED の hand (B.4) side/direction の意味

- a. c1000 Sette Ephraim on his swiþran hand þæt wæs on Israheles wynstran hand.
((He) set Ephraim on his right side that was on Israhele's left side.)
- b. c1205 Heo isezen an heore riht hond, a swiþe fæier æit-lond.
(They saw on their right side, a very fair island.)
- c. c1320 Chese on aiþer hand Wheþer þe leuer war Sink or stille stand.
(Choose on either side whether it would be better for you to sink or stand still.)
- d. 1513 At the last he came out ... with a Bishop on every hand of him.
- e. 1598 ... Augustus was on the mending hand. (in the way to recover)

(25) OED の hand (B. 32i) on (the) one hand, on the other hand

- a. 1638 My mother...being sicke on one hand, and my selfe on the other.
- b. 1705 We are obliged to depart without our Money: But on the other hand, the next time we come hither, we are sure to be honestly paid.

(26) right hand side / left hand side

- a. Is it because the right hand side is going so badly? (subject) (A08)
- b. ...the right hand side should have been even more solid, even more thought through than the left. (subject) (A08)
- c. When we've got the left and right hand side of the document which Joan's well on with at the moment, ... (object) (FUK)
- d. Take a clean sheet of paper and use only the left hand side. (object) (CBU)
- e. On the right hand side, you come out and onto the patio.... (adjunct) (KCF)
- f. A little way up on the left hand side is the Museum Dr Frederico Freitas... (adjunct) (CA7)

もちろん他の事例に関しても歴史的に意味解釈が廃れていたり、変化していつているものがあるはずであり、その点までも含めて検証することが必要であるが、現時点での英語に関するデータ処理としてはこまめとしておきたいと考える。繰り返しになるが、eye(s), hand で付加詞位置にだけ認められた2つの意味解釈は、いずれも OED に明記された、これらの語彙項目の意味として確立しているものであることと、項位置における用例が古くから存在し、現在ではその用法が廃れ、むしろ付加詞位置において優位に用いられる意味として

定着しているものである、ということを述べておきたい。¹⁰⁾

4. 日本語に関する調査

4.1 調査方法と分類上の留意点

英語だけではなく、現代日本語に関しても調査を始めているので、現在までの状況を報告しておくこととしたい。現代書き言葉の均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ)) を利用して、英語の場合と同じくある名詞が使用されている500事例 (argument 用例 250 と adjunct 用例 250) をピックアップし、それぞれが何を指示対象としていると考えられるかを分類してみた。ここでも分類上の留意点として、英語の場合と同様の手順を踏んでいるが、日本語特有の留意点として若干補足をしておきたい。

(A) 項・付加詞の判断基準として、主格や対格表示の名詞句は項と見なすが、これ以外の名詞句に関しては、『デジタル大辞泉』(2009年版)(23万語以上収録)で当該の意味の用例として、問題の意味役割表現が例文に記載されている場合は、項要素であると見なして分類しておく。

(B) 「XのY」のX位置に当該の名詞句がある場合については、以下のように分類しておく。

(i) Yが具体物であり「Xが所有するY」という所有関係にある場合は、XはYの限定詞であると考え、付加詞用例と分類する。

e.g., 広島のアパート、一升瓶の蓋、白バイのナンバープレート

(ii) Y位置に出来事、状態を表す名詞が登場している場合、またはYが述語形容詞である場合、主要部名詞や形容詞が表現する命題内容に関わる意味役割を与えられた要素と見なし、項(または付加詞)として分類する。

e.g., スタジアムの増築、広島の大砲、頭の働き、頭の悪い～

(iii) 所有関係とも、命題内容を表すとも考えにくい場合は、主部名詞を修飾する付加詞と考え、付加詞として分類する。

e.g., スタジアムの歓声、広島の大砲、広島の場合、頭の上、鼻のまわり

まずはじめに日本語20名詞の調査結果分布を英語の場合と同様にまとめて提示しておく。

日本語の調査結果

① AEの解釈幅がJEの解釈幅より広いもの(7事例)

頭、口、目、広島、スタジアム、やかん、肩

② AE, JEともに確認でき、解釈幅に変わりがないもの(7事例)

永田町、白バイ、漱石、新聞、関ヶ原、鍋、腕

③ AEのみが存在し、JEが確認できなかったもの(2事例)

椅子、一升瓶

④ JEにAEに存在しない解釈が認められたもの（4事例）

足、鼻、手、耳

4.2 ①グループの検証

① 頭 [AL: 163, JL: 114]

AE	87 (Mind: 42, Intelligence: 42, Beginning: 1, Person: 1, Hair: 1)	17.4%
JE	136 (Mind: 113, Intelligence: 14, Beginning: 9)	27.2%

頭 (AE)

- (27) a. 物理部所属で頭は良いが... (intelligence) (OY14 53871)
 b. ちらりと頭をかすめたその思いも、すぐに消えた。 (mind) (OB1X 00140)
 c. ううん... 来週頭だ♪ しょうしょう♪ (beginning) (OY03 08577)
 d. つられたように坊主頭も坂田を見やる。 (person) (PB19 00588)
 e. しばらくして、頭がすっかり薄くなり... (hair) (LBt9 00133)

頭 (JE)

- (28) a. 自分の頭の中にもスクリーンに投影したい映像があるんで。 (mind) (OC14 05700)
 b. ほかの者はあたまからばかにした顔つきで... (beginning) (LBnn 00012)
 c. 人間の頭では考えられないところだと思う。 (intelligence) (LBt7 00056)

比喩的な表現でありながらも、「頭」という名詞の指示関係には変化がないと思われるALの事例と分類したもの（29事例）には、「頭を下げる（謝る）、頭を垂れる（うなだれる、落胆する）、頭が下がる（感心する）、頭にくる（立腹する）、頭に血が上る（立腹する）、頭を冷やす（冷静になる）、頭をもたげる（生じる、思い浮かぶ）」などがある。注7にもあげたように、全体として比喩表現と解釈されても、当該の名詞部分だけを取り出して概念拡張が認められないのであれば、literalなものと分類しておく。例えば、「頭を下げる」は、この動作全体で「謝る」行為を表しているが、「頭」自体はあくまでも人間の「頭部」を指す表現であり、拡張事例であると考えする必要はないと思われる。

① 口 [AL: 137, JL: 184]

AE	113 (Words: 79, Opening [metaphor]: 31 Taste: 2, Job: 1)	22.6%
JE	66 (Opening [metaphor]: 45, Words: 21)	13.2%

口 (AE)

- (29) a. それを絶対口にするなよ。(word) (LBI7 00016)
 b. 口のうまい坊主大名である。(word) (LBm9 00244)
 c. ...運転手はカッターナイフでダンボール箱の口を切り裂き... (opening) (PB59 00123)
 d. あとは口に合わないとか。(taste) (OC14 08092)
 e. あなた、隊商の護衛の口を考えているっていったでしょう? (job) (PB39 00465)

口 (JE)

- (30) a. しかし直接口で自慢するよりは、社会的に通じる表現形式、... (word) (LBI3 00142)
 b. ...エアコン吹き出し口から下の部分のダイヤルはエアコン操作用ダイヤルになる。
 (opening) (PM21 00245)

ちなみにAE「言葉」の用例としては、「口にする・口にできない、口に出す・口に出さない、口を挟む、口を出す・口を出さない、口を揃える、口を慎む、口が汚い、口だけ達者、口のうまい坊主大名、憎まれ口を叩く、口を極めて褒め称える、口ばかり強そう、口と心が一致する、口が悪い、口がへらない、口に気をつけよ」がデータ内に存在した。

① 目 [AL: 124, JL: 179]

AE	126 (Line of sight: 51, Vision: 27, Look in the eyes: 12, Experience: 11, Attention: 9, State/Situation: 6, Perspective: 6, Mind: 3, Affection: 1)	25.2%
JE	71 (Look in the eyes: 33, State/Situation: 13, Vision: 10, Perspective: 9, Line of sight: 6)	14.2%

目 (AE)

- (31) a. 戸外に目を転ずると... (line of sight) (PB29 00533)
 b. 立ち寄った足柄SA, 目に入ったのは... (vision) (OY15 22524)
 c. ...早紀子さんの目は笑っていた。(look in the eyes) (PB35 00060)
 d. どんな目に遭いましたか? (experience) (OC14 04107)
 e. 室内で目をひくのが楕円形の大テーブルである。(attention) (LBj3 00111)
 f. 見た目が華奢で顔立ちがおとなしい少女風で... (state) (OC09 06826)
 g. 金に関しては厳しい眼をもっているが... (perspective) (LBs1 00032)
 h. 光った出刃包丁や刺身包丁が目浮かぶ。(mind) (LBI9 00186)
 i. 祖父がせっかく自分に目をかけてくれたのに... (affection) (LBe2 00005)

目 (JE)

- (32) a. なぜ彼女は私をあのような目でみたのだろう? (look in the eyes) (LBe9 00218)

- b. 私たちの目だけでとらえて、これが庭だというのではない... (vision) (PB25 00122)
- c. 見た目で選ぶと、必ず失敗しますので... (state) (OC09 00695)
- d. 特に女性の目からは、どはずれた魅力が逆に... (perspective) (OB5X 00185)
- e. その眼から理由もなく隠れてしまいたい気持ちと... (line of sight) (PB49 00014)

「目が二重になる」「目が開かない」「目を閉じる」などは、厳密には「目」ではなく「まぶた」を指しているが、「目」に属する身体部位を指すものと見なし、ここでは literal に分類しておく。

なお、「X番目」のような順番を表す接尾辞の「目」や、「控え目」「ひいき目」のような性質、傾向を表す接尾辞は、指示的な用例ではないと考えて除外している。

① 広島 [AL: 197, JL: 212]

AE	53 (Team (baseball, soccer, etc.) 45, Bombing: 7 Concert: 1)	10.6%
JE	38 (Team (baseball, soccer, etc.) 27, Bombing: 11)	7.6%

「広島」は literal な地名よりも、「広島カープ」や「サンフレッチェ広島」などの固有名詞の一部として組み込まれた形で登場している用例が多く、これらはすべて除外している。

① スタジアム [AL: 138, JL: 166] (固有名詞事例が大量に存在しているが、すべて除外)

AE	6 (Audience: 3, management: 2, meeting place: 1)	1.9%
JE	9 (Audience: 8, meeting place: 1)	2.8%

① やかん (ヤカン、薬罐、薬缶) (206例) [AL: 116, JL: 74]

AE	11 (Water: 9, bald head [metaphor]: 2)	5.3%
JE	5 (Water: 5)	2.4%

① 肩 [AE: 244, JE: 244]

AE	6 (Shoulder part [metaphor]: 2, Throwing ability: 4)	1.2%
JE	6 (Shoulder part [metaphor]: 6)	1.2%

4.3 ②グループのデータ検証

ここでは、データ表のみを提示しておく。

② 永田町 (152 事例) [AL: 16, JL: 43]

AE	26 (National government: 26)	17.1%
JE	67 (National government: 67)	44.1%

② 白バイ (65 事例) [AL: 8, JL: 32]

AE	16 (Police officer: 16)	23.5%
JE	9 (Police officer: 9)	13.2%

② 漱石 [AL: 224, JL: 238]

AE	26 (Works: 26)	5.2%
JE	12 (Works: 12)	2.4%

② 新聞 [AL: 189, JL: 239]

AE	61 (Company: 50, Writer: 11)	12.2%
JE	11 (Company: 10, Writer: 1)	2.2%

② 関ヶ原 (91 例) [AL: 12, JL: 34] (「関ヶ原の戦い (役、合戦)」は固有名詞扱いで除外)

AE	12 (War: 12)	13.2%
JE	33 (War: 33)	36.3%

JL のうち少なくとも 11 事例は、場所 (literal interpretation) と出来事 (expanded interpretation) の両方に曖昧であると考えられた。このような事例は 3.1 節 (iv) に従って literal なものとして分類しておく。

e.g., (i) 伝記作者の恵中は、関ヶ原から帰ったあと大坂冬の陣に参戦するまでの間...

(PB11 00057)

(ii) 秀吉の死後、関ヶ原で徳川家康に対したが敗れ、四条河原で斬首された。

(LBd2 00049)

(iii) 関ヶ原では久方ぶりに熱く血をたぎらせることができた。

(PB59 00261)

② 鍋 [AL: 173, JL: 184]

AE	77 (Contents: 77)	15.4%
JE	66 (Contents: 66)	13.2%

② 腕 [AL: 203, JL: 229]

AE	47 (Skill: 44, Arm-like object [metaphor]: 3)	9.4%
JE	21 (Skill: 19, Arm-like object [metaphor]: 2)	4.2%

4.4 ③グループのデータ検証

③ 椅子 [AL: 246, JL: 250]

AE	4 (Post/status: 4)	0.8%
----	--------------------	------

「知事のイスに収まる」「重役の椅子が待っている」などは、字句通りの「椅子」も指し示していると考えられるけれども、ただ物理的に「椅子」に座ることを指し示しているのではなく、「その地位に収まる」ことが重要な意味であると考えられるので、ここでは post/status の意味を表しているものと考えておく。

③ 一升瓶 (54事例) [AL: 16, JL: 20]

AE	18 (Sake: 18)	33.3%
----	---------------	-------

4.5 ④グループのデータ検証

問題となるのはこのグループであるが、興味深いこととして4つとも身体部位表現であることが挙げられる。英語でも同様であったが、身体部位表現は多くの意味解釈を許し、その意味の変遷も複雑であることを示唆していると思われる。

④ 足 [AL: 232, JL: 238]

AE	18 (Walking/running: 13, Trace/vestige: 2, Supporting device [metaphor]: 1, Coming and going: 1, Transition: 1)	3.6%
JE	12 (Walking/running: 9, <u>Transportation means: 2</u> , Supporting device [metaphor]: 1)	2.4%

足 (AE)

(33) a. 同等くらいに足が速い人をリーダーに立てます (running) (OC14 05545)

b. 意外に足の早い栗田のあとを一步遅れて追いながら... (walking) (LBI9 00051)

c. だが東京でやると足がつくので、神奈川を選んだ。(trace) (LBm9 00151)

d. そして足もおなじみの「スポルティーボ」で、... 楽しく走れちゃう。

(supporting device) (PM25 00056)

- e. ... グルメ (?) たちの足がひんぱんだ。(coming and going) (OY14 21089)
- f. 陽あしがのびるなかで生は過剰となることなく... (transition) (OV2X 00065)
- cf. g. 彼に連れて行ってもらわないと、湘南までの足がない。(transportation means)
(OB5X 00172)
- 『日本国語大辞典』(2000-2002)「足」②—イ 移動の行為そのもの、また移動のための手段→足が遠い、足を奪う、足しげく
- 「足が遠い」の項目より:
- h. すっきと御足か御遠(とふ)く成なんしたの(1770)
- i. 此頃さっぱり藤(とう)さんの足は遠し、便りはなし(1832-33)
- cf. j. 英国のゼネラルストライキに教えられるまでもなく東京市民はかつて市内電車の罷業によって足を奪われたにがい経験を持っている... (国民新聞 1926.7.10)

足 (JE)

- (34) a. ... 札幌でも足しげく歯医者通いになりそうです(汗) (walking) (OY14 52114)
- b. 濱田は横手投げの田方に対し、足で突破口を開いた。(running) (PN4m 00018)
- c. ... 「足」としての車選びではなく... (transportation means) (PB5n 00138)
- d. 雑誌とを見て、足のブランド見ると、ほとんどACCだよ。(supporting device)
(OC06 01515)
- cf. 『日本国語大辞典』(2000-2002)「足」②—イ 移動の行為そのもの、また移動のための手段
- e. ... そしてバスと自転車が新中国の足として早くもこれにとって代わりつつある(1956)

全体としては比喩的な表現でありながら、「足」の指示対象が拡張していると考えerの必要がなく、ALと分類したものには、「足を運ぶ(移動する)、足を引っ張る(邪魔をする)、手も足も出ない(降参する)、足を洗う(縁を切る)、足を向けて寝る(恩を忘れる)、足を棒にする(歩き疲れる)、足が向く(立ち寄る)」などが見られた。

また、本稿の最初に断ったように Active-zone の区別はカウントせず、すべて literal な「足」と見なす。

- (i) 立てるだけの足の力が残っているかどうか(足の脚部)
- (ii) 足の裏が切れている(足のくるぶし以下の部分)
- (iii) 足をぶつけて爪が黒くなっています。(つま先部)

JE のデータしか 500 例中には見つけられなかった、「交通手段」としての「足」の用例で

あるが、AE の用例として「足がある」「足がない」のような表現が検索範囲を広げると登場してくる。(33g) にあげておく。なお、この解釈であるが、『日本国語大辞典』では「足が遠い、足を奪う、足しげく」といった句表現で用いられると紹介され、(33h,i) のような用例が「足が遠い」の項目内にあげられている。項位置の用例が古くからあったものと考えられるのではないだろうか。

特にこの3つの表現の中で「交通手段」の意味を最も明確に表していると思われる「足を奪う」の用例に関して調べてみると、『日本国語大辞典』では、用例はあげられているものの、年代の記載がなかった。しかし、「神戸大学附属図書館新聞記事文庫」のデータベース内には、(33j) が大正 15 年の記事として記録されている。この「交通手段」の意味が明確に現れている『日本国語大辞典』の用例は、(34e) のような付加詞用例であったが、少なくともこのような付加詞位置の用例が、先んじて用いられていた、ということにはならないように思われる。

④ 鼻 [AL: 219, JL: 247]

AE	31 (Snivel: 25, Sense of smell: 6)	6.2%
JE	3 (Sense of smell: 1, Beginning: 1, Tip of a thing [metaphor]: 1)	0.6%

鼻 (AE)

- (35) a. ...ときおり鼻をすすりあげる音が混じる。(snivel) (LBj9 00237)
 b. 鼻をかんだりしてはいけなひのは、圧がかかつて... (snivel) (OY14 30519)
 c. 喫煙者は、鼻がバカになっているので、それに気がつかないだけです。(sense)
 (OC08 01508)
 cf. d.... ヨーゼフ 2 世の出鼻をくじくものだった。(beginning) (LBk7 00056)
 e. よりリアルになった芝居の初っ端がこの人達で良かった。(beginning)
 (OY14 45960)
 f. 岬の鼻に大きな海流の渦があるから (tip of a thing) (LBi2 00056)
 『日本国語大辞典』(2000-2002) 語源は端 (ハナ)、初・初成 (ハナ) とする説がある
 g. 震たつゑしまのはなをみ渡せはたみかへしたる心ち社 (こそ) すれ (1182 頃) [端]
 h. 水はてはなであたらしく生 (さん) なぞ (1527) [始め]

鼻 (JE)

- (36) a. 狼の鋭い鼻にとって、このにおいはすでに嗅ぎ慣れたものだった。(sense)
 (LBt9 00060)

- b. 無理にとりつくろっていると思って鼻から相手にしていません。(beginning)

(LBi1 00038)

- c. 俺たちが岬の鼻のところで釣りをしているのを知っているのは、... (tip of a thing)

(LBk9 00203)

全体としては比喩的な用例であるが、当該名詞自体はliteralなAL用例としては、「鼻にかける(自慢する)、鼻をへし折る(やり込める)、鼻にかかった(自慢気な)、鼻につく(感心しない)、鼻を明かす(出し抜く、形勢を逆転させる)」などがあり、JLとしては、「鼻の下を長くする(にやにや、でれでれする)」が見つけられた。

『日本国語大辞典』によると、鼻は、端(はな)または初・初成(はな)を語源とするという説もあり、「端の部分、最初の部分」などを表す意味と、この身体部位は古くから語彙的に強い意味的関連を持つようである。AEの用例として、BCCWJにも500事例外のデータには(35d,e,f)のような用例が認められる。少なくとも語彙的にこの意味は「鼻」に深く関連するものであり、特殊な概念拡張を経たものであると考える必要は無いのかもしれない。また同書では、(35g,h)のような事例が取り上げられており、項位置での用例は古くから存在していたと考えられる。「始め」の意味では(35h)のように「出鼻(でばな)」というフレーズで古くから利用されていたようである。

④ 手 [AL: 205, JL: 213]

AE	45 (Means: 17, Labor/skill: 12, Cooperation: 7, Control: 4, Move in a game: 3, Person: 1, Action: 1)	9.0%
JE	37 (Labor/skill: 15, <u>Type</u> : 13, Means: 7, Person: 2)	7.4%

手 (AE)

- (37) a. これでも打てる手はとりあえず全部打ってきたんだぜ。(means) (PB59 00444)

- b. 砂も石も、彼らの手にかかれば金となり... (labor/skill) (LBh9 00228)

- c. ...奥さんの手を借り家の中まで送り届けた... (cooperation) (OW1X 00342)

- d. ...荊州が曹操の手に落ちたとき、改めて曹操に取り立てられた。(control)

(OY13 07587)

- e. まだイーシャンテンだし、ジッとガマンで手を作り直していくべきであったと思う。

(move in a game) (PM21 00262)

- f. 手は足りるか、工期は足りるか... (person) (OC09 13347)

- g. それは、つまり、私が手が早いということですか (action) (LBh9 00124)

- cf. h. この手が好きな方には、お勧めの1枚です。(type) (OY05 01469)

『日本国語大辞典』（2000-2002） 手⑥ ある方面や種類

i. 山の手ゆゆしき大事の所に候（14c.前）

（三草山から一ノ谷に通じる山の手道の道はとりわけ大事なところです。

『完訳源平盛衰記6』）

j. 此手の茶入、古田織部重勝〈略〉国国へひろめ給ふと也（1694）

k. はい、此頃はしょっちゅう其の類（テ）を召上がる様でございます（1902）

手（JE）

（38）a. ...創作人形作家の手による人形の場合...（labor/skill）（PB37 00013）

b. 最近多いですね、この手の演出。（type）（OC11 00801）

c. あの手この手で親が手を焼くようなことをします。（means）（PB14 00277）

d. ...導きの手の影響をかすかに感じ取れるように思うときがある。（person）

（OB5X 00006）

ここでは「引き受け手」は「人」を表す expanded reading の「手」とカウントするが、「運転手、外野手」などは「て」という読みではないため、データからは除外する。また、「三番手、四番手」などの順番を表す接尾辞の「手」は名詞と考える必要もないと思われるため、これも除外している。

さて、種類を表す「手」であるが、AE が 500 事例のデータ内には存在しなかったが、検索範囲を広げると（37h）のような事例を見つけることができる。この意味は『日本国語大辞典』では、「方面・種類」というグループで捉えられており（37i）のような例が古い用例として挙げられている。「種類」を表す例としては（37j）の付加詞用例が古いものとして記録されており、項位置の用例はずっと後のものしか記載されていない。ただ、この意味グループ自体を考えてみた場合には、やはり項位置の用例が古くから存在しているようである。

④ 耳 [AL: 222, JL: 240]

AE	28 (Sense of hearing: 26, Tip of a thing [metaphor]: 2)	5.6%
JE	10 (Sense of hearing: 5, Tip of a thing [metaphor]: 3, Person: 1, Listeners: 1)	2.0%

耳（AE）

（39）a. 速記者は精一杯チャツニーの言葉に耳を澄ませたが...（Sense of hearing）

（PB29 00509）

b. ...パンの耳がまた口ハス的で良いですね。（Tip of a thing）（OY03 03402）

- cf. c. 「そうよ、みんな地獄耳だから。」(Person) (JBs9 00128)
- d. 「ご存知でございましたか」「なんの。地獄耳でござる。」(Person) (OB1X 00245)
- 『日本国語大辞典』(2000-2002)「地獄耳」②他人の秘密などを素早く聞き込むこと、またそういう耳をもった人
- e. 「俗家も戒をたもち社あれ しつむべき事をおそるる地獄耳」(1650)
- f. 「小倅が様子迄 此地獄耳へ突き抜いたれば絶命」(1757)
- g. 「頼朝公から極楽寺へ、仏のための祠堂金、三千両納まったと、ちらりときいた地獄耳」(1859)
- cf. h. 木曜の深夜は耳の数が足りない。でも、金曜の深夜にはたくさんの耳がきいてくれている。

耳 (JE)

- (40) a. 料理は「目」と「耳」でも味わえるんだねえ〜 (Sense of hearing) (OY03 01867)
- b. 「あのもめん豆腐の、耳のかたいトコが、またおいシて」(Tip of a thing)
(LBg9 00028)
- c. 亀田さんみたいな地獄耳から貴重なインサイダー情報を死守しなくてはなりませんからねえ。
(Person) (LBd9 00162)
- d. 木曜の深夜は耳の数が足りない。TOKYO-FMでは1時半〜2時半まで... (Listeners)
(PB46 00190)¹¹⁾

ここでは AE に存在しなかった「人」としての解釈は、JE では「地獄耳」というフレーズで登場していた。このフレーズ自体は、項位置での用例も検索範囲を広げるとすぐに見つけることができる (39c,d)。また『日本国語大辞典』でも (39e, g) のように関係節の主要部として生じ、関係節表現との意味関係において項として機能していると考えられる例や、(39f) のように項位置の用例と捉えられるものもあり、古くからの項位置での使用例が認められる。¹²⁾

一方で「リスナー」という意味では、(40d) の例があったが、これは文脈に強く依存した用例である。ラジオ番組に関するエッセイの冒頭の表現であることが重要であり、これ以前、以後にもこの形では生じていない、全く創造的な一度限りの言語使用と思われる。ラジオのエッセイであるという文脈を外して考えた場合、理解することは難しいと思われる。これに対応する項位置での使用例は見つけられなかったが、ただ (39h) にあるように一端この解釈が与えられれば、項位置に置いても簡単に使用することは可能であり、ここでも付加詞位置「のみ」において生じる解釈というのは認められないと言える。¹³⁾

5. コーパスデータ検証からのまとめ

ここまでの調査から得た結論としては、基本的に概念拡張解釈には非対称性が認められ、項位置における拡張解釈が優勢であることが判明したと思われる。逆に付加詞位置における解釈のバリエーション（タイプ頻度）の方が大きくなる名詞は英語の eye(s)、日本語の「鼻」「耳」のみであった。また、付加詞位置において項位置にない解釈が認められたのは英語の eye(s) と hand、日本語の「足」「鼻」「手」「耳」であった。（しかも eye(s)、「足」「鼻」「手」および「耳」の「人」を表す解釈については検索範囲を広げることでこの反例は解消し、hand については set phrase として固定された用例が認められるのみである。また「耳」の「リスナー」の解釈は、文脈に強く依存した事例として一事例が存在していたのみである。）

このような調査結果から、基本的には2節で立てた以下の仮説は妥当なものであると考えることができると思われる。

仮説：argument 位置において可能な拡張解釈は必ずしも adjunct 位置において成立することはないが、adjunct 位置において成立する拡張解釈は、基本的に argument 位置においても認められる。（adjunct 位置においてのみ認可される概念拡張は見出しにくい。）

同時に以下のようなことが示唆され、今後の更なる調査の方向性が導かれるものとする。

(i) 項から付加詞に意味拡張が浸透していくという方向性が生産的な解釈拡張のパターンであって、少なくとも逆の方向性で拡張義が浸透していくパターンが生産的なわけではないだろうという考え方が支持される。もちろん、ここで扱ったのはそれぞれの名詞に関して500事例ずつ、というごく小規模な分布調査でしかなく、これによって英語30、日本語20の名詞の意味分布の全容が決定されるなどということは全くない。しかし、いくつかの異なる名詞に関しての調査を繰り返していくことから見えてくる全体の傾向というものには、それほど大きな誤差はないのではないかと考えられる。この点については更に多くの名詞についての調査を重ねていくことで、確信度を高めていくことができるのではないかと考える。

(ii) この拡張パターンの方向性から考えられる一つの可能性として、まず項位置において特定の解釈が固定され、これが定着することによって、この文脈から独立した付加詞位置でも利用できるようになっていくというストーリーが有望であると考えられる。ただし、これは歴史的な資料によるサポートが必要であり、今後の検証が必要となる。（今後、歴史的なコーパスデータの検証を少しずつ時代を遡りながら行っていく予定である。）

(iii) ただし、この方向性のみが概念拡張に認められる唯一のルートである、と考えることは明らかな間違いであり、逆の方向性も存在している。（「耳」で「リスナー」を表す事例から明らかである。）ただ、現在のところそれは生産性が著しく低いものと考えられる。

(iv) このような概念拡張は、特定言語にしか認められないということは不自然であると思われるため、様々な言語にも同じような概念拡張のパターンが認められるのかどうかの検証が必要である。そうすることで、一般的、普遍的な概念拡張のパターンを確立していくことができるのではないかとと思われる。

(v) 語彙概念拡張という観点から見た場合、ことさらにメトニミーとメタファーを区別だてする必要はなく、同じ振る舞いを見せるものとして捉えることは可能なのではないかとと思われる。これは、近年認められるメタファーとメトニミーのカテゴリー分化の難しさに対する認識(Barnden 2010, Evans 2010)と軌を一にするものである。

本稿では、名詞の語彙概念拡張を、当該名詞が項として文内に導入されているのか、付加詞として導入されているのか、という区別立てと関連づけて調査することで、その解釈分布の非対称性を導きだした。英語と日本語のいくつかの名詞に関するコーパスデータの調査を行うことで、生産的な概念拡張の方向性、概念拡張の仕組みについて考える契機が与えられたことになると思われる。

注

- 1) 本稿では、メトニミーという用語はできる限り使用しないでおく。この概念が広く研究者によって様々な捉え方をされており、active zone-profile discrepancy をその適用範囲に含めたり、名詞だけにとどまらず、述語表現などにも適用されたりしているためである(The referee *pulled out the yellow card*. や How did you get to the airport? *I waved down a taxi*. など)。本稿では、単純に名詞が default referent 以外の指示対象を指し示していると考えられる場合だけを取り上げ、概念拡張という呼び方を用いる。ただし、他の研究者の研究内容に言及する場合には、メトニミーという用語が多用されていることから、便宜上この用語も用いる。
- 2) The kettle is boiling で「ヤカン」ではなく「ヤカンの水」を指すのは、動詞 boil の意味的な選択制限が働くからであり、I put out the fire with the kettle でそのような解釈が認めにくいのは、この種の選択制限が課せられないからである、と考えることもできる。もちろんそのような側面があることは疑いないものだと思うが、それだけの問題でもないだろうと考える。例えば、以下の例文において一端 the phone (=the person on the other end of the line) を文内に導入しておいて、John と相手の人(誰なのかは John 以外の人にはわからないので)の邪魔にならないようにテレビを消す、といったことがあったとしても、当初のコンテキストを離れて the phone が人を指す読みにはなりにくいようである。ここでは adjunct 位置において、十分な文脈上のサポートがあるにもかかわらず literal な解釈のみが可能となっている。John と等位接続されることで the phone にも「人」の解釈が求められても良いと思われるが、そのような拡張は認めにくいようで

ある。等位構造が課す選択制限があっても付加詞位置では有効に機能しないものと考えられる。

#John answered the phone, but the place was incredibly noisy at the time, so Mary immediately shut the windows and turned off the TV for both John and the phone.

- 3) これを擬人化の用例、と考えることも出来るかもしれないが、他の無生物の擬人化の場合とは違って、study の場合には関連概念として研究に従事している人間を認定することができると思われるので、ここでは研究者を指しているものと考えておく。これに対して、

(i) The old Victorian hospital had reached the end of its life.

(ii) Some hospitals have lost 15 percent of their nurses.

などは、病院のスタッフを表す概念拡張事例と考えることが難しいものであり、擬人化の事例であると考えられる。

- 4) 使用頻度という尺度で考えることも可能かもしれないが、ただ単純な token frequency を根拠とすることは危険だろうと思われる。例えば、study で researcher を指すのは、argument 位置において生産的で、付加詞位置では少ない。しかし逆に、door で建物全体を指す解釈は項位置よりもむしろ付加詞位置で多用されている。ある拡張解釈が項位置、付加詞位置どちらでより多く使用されているかを調べてみると、(つまりどちらの位置においても認められる解釈59種を分類してみると) 項位置が多いものが30、付加詞位置が多いものが22、同数であったものが7となり、項位置での拡張解釈の方が付加詞位置での拡張解釈よりも token level での使用頻度も高くなる、とは言えない。使用されていくうちに、セットフリーズ化してむしろ付加詞的位置において多用される解釈というのもありえるし、歴史的な発展経過を個別のケースに関して調査していくことが更に必要となる。

- 5) 他にも、時や場所の名詞句が他動詞文の主語位置に生じて、概念拡張が生じる場合もあり、Waltereit のハイエラーキーに対する反例は多く認められるものである。

(i) September 1991 saw an increase of 18% in undergraduate entry into Semester 1 course.

(People saw an increase of 18 % ... in September 1991.) (BNC HCG)

(ii) The 19th century witnessed the evolution of public and saloon bars.

(People witnessed the evolution ... in the 19th century.) (BNC AOB)

(iii) The city of Worcester witnessed the beginning and the end of the bloody revolution. (People witnessed the beginning ... in the city of Worcester.) (BNC K1D)

- 6) ①グループの他の事例を紹介しておくと、Mercedes を調べたが、これはダイムラーベンツ社（今はダイムラークライスラー社）の車種名であり、元々は会社名ではない。ダイムラーの支援者の娘の名前からメルセデスという名が付けられており、確かに、会社名としての用例は BMW に比べて少なく、圧倒的に車を指す解釈が多かったのであるが、ここでも BMW の場合と同じことで、会社の代表者、スポークスマンを指す用例や、レースのドライバーを指す用例が argument 位置に

は見つかり、adjunct では車を指す用例しか見つけれなかった。本来は車の名称でしかなかったものが、会社を表すものと理解され、またその会社を代表する人間を指したり、そこが資金を出しているレースチームのドライバーを指すように用いられているというのも面白い現象であると思われる。

7) 身体部位表現は、様々な解釈に用いられるので、いくつかの事例を具体的に考察しておく。

(i) put (lay) one's hands on-- は、「入手する」であるが、文字通り「手を置く」動作が「入手する」という動作の事前動作として近接関係にあるという意味でメトニミーであると考えられる。このとき、hand は文字通り「手」を表しているのであり、その表現が、動詞などと組み合わせられて全体となったときにメトニミカルな意味を生じているので、hand 自体は概念拡張しているとは思えない。この場合、put (lay) one's X on Y の X のところに hand 以外のどのような表現を置き換えれば、「入手する」という意味になるのかが判然としないので、別の表現で表せる意味を、この hand が代弁している、というわけでもない。また、X が hand である時にも、Y のところに例えば the table が来れば物理的な行為を示せるし、the information が来れば比喩的な「入手」を表しているのであり、Y によって意味が変化するなら、X 自体の意味変化というより、Y を補部として取っている predicate 全体 (put one's hands on --) の意味が変化している、と考えるべきであろうと思われる。いずれにしても hand が「手」以外のものを指していると考えerの必要性はないように思われる。

(ii) have an eye on-- (いくつか意味があるが、そのうちの一つ) は、eye で、目で見つめる先の標的を表していると考えることができ、have an aim at のように表現することができるものであり、eye の概念拡張であると考えer。他にも have an eye for-- などでは perspective (taste) の意味でも用いることができる。

(iii) keep one's eyes on (off) -- は、目を用いて行う「注目」attention をある対象に注ぐことを表現していると考えerことができるので、eyes の概念拡張であると考えer。

本稿では、基本的に問題となっている名詞表現を別の表現に置き換えて言語化することで、目標とする意味を表わせる場合は、名詞の概念拡張であると考え、その部分を別の表現に置き換えるだけで目標とする意味を表すことが困難な場合は、当該の名詞自体の概念拡張とは考えないこととする。

8) BNC では have an eye to (on) ~ は 26 例、with an eye to (on) ~ は 99 例存在した。COCA (Corpus of Contemporary American English) では、前者は 62 例、後者は 394 例存在した。(ただし、いずれのコーパスでも have an eye to ~ に関しては、aim の解釈にらずむしろ perspective の解釈になると思われる用例も若干含まれている。)

9) 歴史を遡ってみた場合、すべて項位置から新たな意味解釈がスタートしていると言えるのか、という問題に関しての初期調査としては、ここで挙げたデータに関して、以下のような結果を得

ている。OED では30個の名詞のうち28個までが記載されている (BMW, Vietnam は記載なし (Vietnamese はある))。この28個に関して、ここで特定した意味に相当すると考えられる記載事項は少なくとも40事例存在した。このうちで、初出事例とその次の事例がともに項位置における用例であったものは17、初出事例と次の事例がともに adjunct 位置における用例と考えられるものは3、初出事例が項位置で、これに続く事例が adjunct 位置における用例であるものが10、逆に adjunct 位置における用例が初出事例で、後続する事例が項位置における用例であったものが10であった。つまり、初出が項位置であったものは27、少なくとも初出の次の2番目の事例までに項位置の事例が表れているものを含めれば37であり、これに合致しないものは3つだけであったということになる。

この3事例は、以下のものであった。(i) study が room を表す用例は、14～17世紀まで adjunct 事例ばかりが続き、その後に項位置の事例が登場している。(ii) brain が consciousness/sense をあらわす事例は、最初の二つが adjunct 事例であるが、次の3例目には項要素の事例が登場している。(iii) eye が view/perspective を表す事例も14～17世紀までの用例は adjunct 事例が続き、その後に項位置の事例が記載されている。

この問題は、拙論 (2015) において取り上げたものであるが、また改めて考えてみる必要がある。しかし40あったいずれの事例に関しても、adjunct 事例しか記載されていない、というものは存在しなかったことは重要であると思われる。

- 10) 項位置における概念拡張事例と付加詞位置における拡張事例は、念のために統計処理を行い、どちらの位置において概念拡張が生産的に認められているのかをグループごとに確認しておく、以下のような結果となった。④グループに関してのみ adjunct 位置における概念拡張事例がより頻繁に生じている、という結果になっているが、これは hand のみに認められる拡張解釈が、この名詞表現全体の使用率において圧倒的な割合を占めているという特異な事情によるものであると考えられる。また、この用例をすべて含み込んでみても、全体としてはやはり項位置において概念拡張が生産的に認められるということが見て取れると思われる。(なお、③グループに関しては、adjunct 用例の実測値が0であることから、 χ^2 乗検定の望ましい適用条件から外れることになるが、ここでは参考として結果をあげておく。)

	Expansion/argument	Expansion/adjunct	χ^2	Frequent in	significance
①	1057/4110	807/4409	67.98	argument	P<0.001
②	510/1744	619/2000	1.21	-----	insignificant
③	81/332	0/304	82.81	argument	P<0.001
④	110/500	185/500	26.33	adjunct	P<0.001
合計	1758/6686	1611/7213	29.40	argument	P<0.001

- 11) 注10と同様に、日本語のデータに関しても検証を行うと、以下の通りであった。ここではまだ集

積できているデータの数が少ないこともあり、十分な検証が行えないが、全体としてはやはり項位置における拡張事例が生産的であることが認められるようである。(③グループに関しては、注10と同じただし書きが必要となる。)

	Expansion/argument	Expansion/adjunct	χ^2	Frequent in	significance
①	404/1521	337/1504	6.83	argument	P<.009
②	265/1090	219/1218	13.54	argument	P<.001
③	22/284	0/270	19.80	argument	P<.001
④	123/1000	63/1000	20.63	argument	P<.001
合計	815/3895	619/3992	38.54	argument	P<.001

- 12) 『日本国語大辞典』の「地獄耳」の項目には①1度聞いたことをいつまでも忘れないこと、またそう言う人、強記、という意味や、③聞いても決して外へ漏らさないこと、聞き捨てにすること、という意味も記載されている。

①の用例としては、「さしもぐさ悪しきとなれば地獄耳に聞きて忘れぬことぞ悲しき」(室町時代物語大成・閻魔王物語)、「地獄耳にをちかへり鳴け子規」(俳諧・犬子集 1633)、「それぞれに無筆なものは地獄耳」(1700) などがあり、③には「... 聞いたら聞き捨て地獄耳」(1737) といった用例があげられている。③の用例は、本文にあげた②の用例より新しく、①の最初の2例が問題として残ると考えられる。

ただ、①の最初の例は、人(阿弥陀如来)そのものを指すと言うより、耳自体を指しており、拡張事例ではないと考えることもできる。2例目は曖昧であるが、②の用例と時期がほとんど変わらず、この頃には、既に人間を指す用法が確立していたことを表すものと考えられるかもしれない。

- 13) (39h) と注2の用例は、対比的といえるかも知れない。(39h) では、付加詞用例における拡張解釈が項位置においてもたやすく認められているのに対して、注2の用例では、項位置における拡張解釈が、後続する付加詞位置でも認められるとは限らないことが示されているからである。項位置における適切な拡張解釈の同定には、必要な処理労力をかけることで問題解決が図られるのに対して、付加詞位置における拡張解釈の同定には、文脈的なサポートが与えられていたとしても、必ずしも十分な処理労力をかけることには至らない、ということが示されていると考えられる。

主要参考文献

- Barcelona, Antonio (2003) "Metonymy in Cognitive Linguistics: An Analysis and a Few Modest Proposals." In Cuyckens, Herbert, Thomas Berg, René Dirven and Klaus-Uwe Panther (eds.) *Motivation in Language*. 223-255. Amsterdam: John Benjamins.
- Barnden, John (2010) "Metaphor and Metonymy: Making their Connections More Slippery." *Cognitive*

- Linguistics* 21/1: 1-34.
- Croft, William (1993) "The Role of Domains in the Interpretations of Metaphor and Metonymy." *Cognitive Linguistics* 4/4: 335-370
- Deignan, Alice (2005) *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Evans, Vyvyan (2010) "Figurative Language Understanding in LCCM Theory." *Cognitive Linguistics* 21/4: 601-662.
- Goossens, Louis (1990) "Metaphonymy." *Cognitive Linguistics* 1/3: 323-342.
- Handl, Sandra (2011) *The Conventionality of Figurative Language*. Tübingen: Narr Verlag.
- Herbst, Thomas, David Heath, Jan Roe & Dieter Gotz (2004) *A Valency Dictionary of English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hilpert, Martin (2006) "Keeping an Eye on the Data: Metonymies and their Patterns." In Stefanowitsch, Anatol & Stefan Gries, *Corpus-based Approaches to Metaphor and Metonymy*. 123-151. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kövecses, Zoltan (2010) *Metaphor*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live by*. Chicago: The Univ. of Chicago Press.
- Langacker, Ronald (1993) "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4/1: 1-38.
- Marantz, Alec (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Nunberg, Geoffrey (1979) "The Non-Uniqueness of Semantic Solutions: Polysemy." *Linguistics and Philosophy* 3/2: 143-184.
- Nunberg, Geoffrey (1995) "Transfers of Meaning." *Journal of Semantics* 12/2: 109-132.
- 岡田禎之 (2013) 「名詞の語彙概念拡張に認められる非対称性」『待兼山論叢』47 (文化動態論篇) 41-62. 大阪大学文学会.
- 岡田禎之 (2015) 「名詞の語彙概念拡張と歴史的変遷に関する初期的調査」『言葉のしんそう (深層・真相)』pp.597-608. 東京: 英宝社.
- Paradis, Carita (2011) "Metonymization." In Benczes, Reka et al. (eds.) *Defining Metonymy in Cognitive Linguistics*. 61-87. Amsterdam: John Benjamins.
- Radden, Günter & Zoltan Kövecses (1999) "Toward a Theory of Metonymy." In Panther, Klaus-Uwe and Günter Radden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*, 17-59, Amsterdam: John Benjamins.
- Radden, Günter & Klaus-Uwe Panther (eds.) (2004) *Studies in Linguistic Motivation*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Reinhart, Tanya & Eric Reuland (1993) "Reflexivity." *Linguistic Inquiry* 24: 657-720.
- 瀬戸賢一 (2005) 『よくわかる比喩』 東京: 研究社.
- Sweep, Josefien (2009) "Metonymy without a Referential Shift." In Botma, Bert & Jacqueline van

- Kampen (eds.) *Linguistics in the Netherlands 2009*. 103-114. Amsterdam: John Benjamins.
- Taylor, John (2003) *Linguistic Categorization*. Oxford: Oxford University Press.
- Traugott, Elizabeth (2004) "Historical Pragmatics." In Horn, Lawrence & Gregory Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. 538-561. Malden, MA: Blackwell Publishing.
- Ungerer, Friedrich & Hans-Jörg Schmid (2006) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. 2nd ed. Pearson: London.
- Waltereir, Richard, (1999) "Grammatical Constraints on Metonymy." In Panther, Klaus-Uwe and Günter Radden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*. 233-253. Amsterdam: John Benjamins.

辞書類その他

- 『デジタル大辞泉』 東京：小学館（デジタル版）
- 『研究社新英和大辞典』 第6版 東京：研究社（デジタル版）
- 『明鏡国語辞典』 北原保雄（編） 東京：大修館書店（デジタル版）
- 中村晃（2005）『完訳源平盛衰記6』 東京：勉誠出版
- 『日本国語大辞典』 第2版 東京：小学館（2000-2002）
- Oxford English Dictionary on CD-ROM* Ver.4, Oxford: Oxford University Press.
- 瀬戸賢一（編著）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』 東京：小学館

Argument-Adjunct Asymmetry in English and Japanese Nominal Conceptual Expansions

Sadayuki OKADA

When a nominal expression designates a referent that is beyond the range of its default referent, the nominal is considered to have a conceptual expansion. We would like to investigate the licensing condition of conceptual expansion of nominals, paying special attention to the argumenthood of the nominals in question. It is demonstrated that argument nominals show a variety of extended references, while the same expressions located in adjuncts only cover part of the designations attested in argument positions. With a preliminary survey into the distribution of extended nominal reference using data from the British National Corpus (BNC) and the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ), we would like to delve into a probable mechanism of lexical semantic change common to English and Japanese.